

## コラム「社会からみる肥満症」

### 1. 要旨

イギリスのNational Audit Office(NAO)発行の新しいレポート“イギリス国内の肥満をやっつける”は、世界レベルでの肥満者の増加に警告を発した。それによると、イギリスではほとんどの人が肥満または太っている。成人の58%はoverweightもしくはBMI 25以上の肥満であり、20%はBMI 30以上の肥満であるという。

他の先進国の状況をもて、同様のことがいえる。アメリカ(Washington D.C.)にあるWorld Watch Instituteによると、アメリカ国内で61%、ロシア国内では54%の成人がoverweightだという。そして、先進諸国における肥満者の数は増え続けている。何より心配の種となるのは、その傾向が継続していることである。NAOによ

ると、イギリスでは肥満者の数は20年前の3倍であり、

このままのペースで増え続けると2010年までには4人に1人が肥満になるという。Centers for Disease Control and Prevention(CDC)の発表では、1991年以降、アメリカで肥満者の割合は57%も増え、毎年、約30万人が肥満に関連した疾患で死亡している。肥満の原因として考えられるのが運動不足と高脂肪食とされ、CDCはアメリカにおける都市部の広がり状況(スプロール現象)と肥満との関連を調べる解明調査にとりかかった。その結果、75%のアメリカ人は推奨標準量の運動(30分間の適度な運動を週に5回)を行っていないことがわかった。

こうしたなか、最近の流行に乗ったやせるための選択肢も無限に広がりつつある。例えば肥満治療薬を使用することで、比較的わずかではあるが、減量効果が認められる。

活気づけとなったのが1995年のレプチンの発見である。それ以来、肥満の研究は新境地を迎える。人々は肥

満を慢性疾患としてとらえるようになった。その一方で、肥満の生理学的、分子生物学的内容がより解明され、理解されるようになり、製薬会社が肥満の研究に投資するようになった。

現在のところ、Food and Drug Administration(FDA)で認可されているのは、食欲抑制薬と、脂質消化吸収阻害薬であるリパーゼ阻害薬(オルリスタット)である。レプチンに続くターゲットとして次に注目されるのは、食欲調節に関与するとされる脂肪細胞の代謝についてである。αアドレナリン受容体アゴニストは褐色脂肪細胞における熱産生を増加し、白色脂肪細胞に貯蔵されたエネルギーを消費する。

### 肥満をめぐる科学者たちの戦い

[Nature medicine, Vol.7, No.4, 2001より]

今年2月にはオーストラリアのある会社が、ヒト成長ホルモンのある部分を合成したものを使用した臨床試験を開始した。薬の名はAOD9604(Advanced Obesity Drug 9604)。貯蔵された脂肪細胞をエネルギーとして消費することを促す。

そして、ごく最近の研究では、脂肪細胞から分泌されるホルモンの分解産物を与えられたマウスは、高脂肪、高エネルギー食を摂取しても減量することができる。なぜなら、その分解産物が筋肉内の遊離脂肪酸の酸化を促進するからである。

### 2. コメント

これほど発症頻度の多い病気への戦いは、昔の感染症への戦いにも似ている。いくつかの治療戦略は確かに効果を示しているが、果たしていくつかの感染症を克服してきた効果が抗生剤のように位置づけられるだろうか。まだまだと思うのは筆者だけだろうか。

(編集部)